

肢体障碍大学生の障碍部位別による体育活動興味調査研究

○金 命 祥 金 成 柱
(国立釜山大学) (聖心外国語専門大学)

1. 緒 言

教育の目的は望まれる人間形成にある。よつて体育も身体活動を通ずる教育であるかぎり、身体活動の潜在的可能性を最大限に発揮させてこそ人間を望ましく形成させる重要な努力なのである。

然し、こんな体育活動の肢体障碍学生達は、身体的欠陥の為に機能が劣等で協応、調整及び統制力が欠如しているだけではなく、こんな身体的障害が情緒面にも重積深化され安定性を欠いているので、体育活動の必要性は正常学生達よりずっと多く強調されなければならない。

2. 目 的

本研究は肢体障碍大学生達に対するもので、障碍部位別に分類してあらわれた体育活動に対する実態を調査することによつて、彼達の潜在的能力を旨まさせることが出来る方案を摸索し、障碍大学生達の体育指導プログラム開発に役立つ資料を提供するのにその目的とする。

3. 方 法

- 調査対象集団： 肢体障碍者全国大学生体育大会参加者
180名中175名(男122名 女53名)
- 調査方法： 質問紙法
- 調査時期： 7月12日～7月14日(3日間)

4. 結果及び考案

肢体障碍大学生の障碍部位別体育活動及び興味度に対する調査結果、次のような結果を得た。

○障碍別分類： 対象集団 175名中、単下肢麻痺が88名(50.3%)で一番多かつたし、両下肢麻痺37名(21.2%)、単上肢麻痺31名(17.7%)、偏麻痺19名(10.8%)の順にあらわれた。

○自身が平素好む運動種目は？

単下肢麻痺の場合は、質問紙の42個運動種目中卓球(23)、平行棒(16)、野球(1)、バドミントン(9)、排球(6)、籠球(6) 登山(5)、水泳(4)、テニス(3)、蹴球(2)……等の順で、両下肢麻痺の場合は、卓球(13)、射撃(6)、平行棒(4)、弓道(4)、撞球(4)、鉄棒(4)順で単上肢麻痺の場合は、卓球(7)、舞踊(5)、ポーリン(4)、射撃(4)、バドミントン(4)、撞球(4)の順で偏麻痺の場合は、卓球(5)、なわとび(4)、ソフトボール(3)等の種目を選ぶことであらわれた。

○自身の実施可能な種目は？

単下肢麻痺の場合は、卓球(54)、排球(44)、投砲丸(42)、バドミントン(34)、籠球(29)、蹴球(25)、鉄棒(23)、射撃(22) 登山(22)、なわとび其の他の種目を選定したし、両下肢麻痺の場合は卓球(21)、射撃(17)、弓道(13)、鉄棒(9)、平行棒(9)順で単上肢麻痺の場合は、卓球(13)、排球(9)、舞踊(6)、籠球(6)、登山(6)、ソフトボール(5)、射撃(6)、バドミントン(6)等で偏麻痺の場合は、卓球(6)、排球(4)、射撃(3)、バドミントン(3)種目順であつた。

○自身が一番見たい種目は？

単下肢麻痺の場合は、水泳(22)、テニス(14)、乗馬(10)、スケート(8)、籠球(7)、排球(7)、水上スキー(7)、ハングライダー(6)、ゴルフ等で両下肢麻痺の場合は、射撃(9)、水泳(6)、弓道(6)、乗馬(6)、スキー(4)、スケート(4)等で、単上肢麻痺の場合は、乗馬(9)、水泳(6)、ゴルフ(5)、水上スキー(3)、射撃(3)、舞踊等で偏麻痺の場合は、水泳(4)、ソフトボール(3)、テニス(3) 射撃(3)、ハングライター、ラクビー等の種目にあらわれた。

○本人の1日の運動時間は？

文項	分類	単下	両	単上	偏	計
30分程度		46	26	21	12	105(60.0)
1時間以上		24	6	6	4	40(22.9)
2時間以上		10	3	4	3	20(11.4)
3時間以上		8	2	-	-	10(5.7)
計		88	37	31	19	175(100)

5. 結 言

肢体障碍大学生達の障碍部位別に効果的な体育指導プログラム開発に役立つ資料を得ようと分析検討した結果を振り返りてみると、次のような結論を得られることになつた。

1. 身体が自由でない肢体障碍学生達は活動しようとする慾望を正常学生達より強烈なものとして見られる事が出来る。
2. 障碍学生達は平素好んでする運動種目は、障碍部位に依る彼達の体格条件を考慮して、毎日30分程度運動を実施していることであらわれた。
3. 障碍大学生達がみずから実施可能な種目に選んだものの中には、実施するのに不適合なものと考えられる種目が多少ありましたが、それは障碍大学生達の運動に対する慾求が自ずから一般学生とは全然変つたところがないのをあらわす強烈な意志を見られるので、体育授業の時間に積極的参加するようにするのが望ましいと言えよう。
4. 障碍大学生達の一番やりたい種目は、彼達の体格条件では遂行しにくい種目に対する強烈な反応をあらわしているため次後これに対する特別な施設、器具、補助裝備の開発に対するいろいろな研究が続けられなければならないと思う。